今月の一品 令和 5(2023)年 8 月

飯能市立博物館 きっとす 今月の一品

飯能市立博物館 Hanno Municipal Museum

庚申信仰（こうしんしんこう）の掛け軸

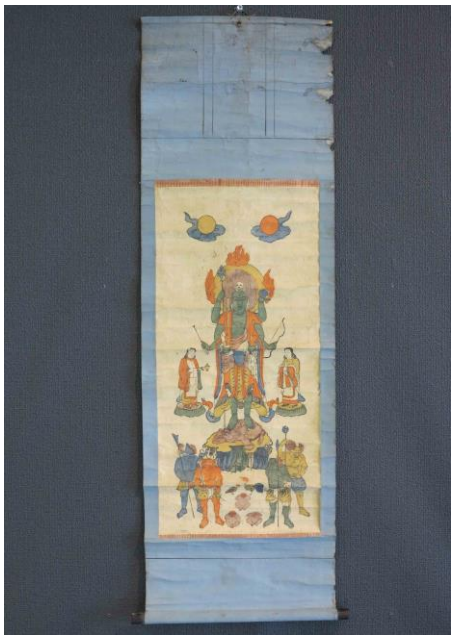
飯能市立博物館 学芸職員 村上 達哉

本資料は飯能市域で収集した資料ではありませんが、寺院で収集されたものを、護符など信仰に関係する資料を理解するために、ご寄贈いただいたものです。庚申講で掛けられたものでしょう。

庚申信仰は、人の体内には三尸と呼ばれる虫がおり、干支に当てはめて庚申に当たる日の夜、眠りに落ちた人の体内から抜け出し、天帝（天におり万物を支配する神）にその人が犯した悪事を報告する、という中国の道教の考えに基づいています。天帝は悪事を働いた人を早死にさせてしまうので、それを防ぐために庚申の日の夜は眠らずに過ごすという守庚申が生まれました。守庚申は平安時代の初め頃日本に伝わったとされ、貴族の間で流行しました。やがて民間にも広がり「庚申会」「庚申待」「庚申講」などと呼ばれ、60 年ごとに供養塔が建てられました。

本資料に描かれた画像を見ていきましょう。中央の大きく青い色をし、怒髪天をつき憤怒の相を現した夜叉神は青面金剛です。青面金剛が庚申信仰の本尊となった経緯ですが、道教では三尸が人体に害を為すと考えられており、その最大の難病が伝尸病（肺結核）でした。「陀羅尼集経」や「庚申経」は青面金剛が伝尸病の治療に対し霊験をもっていると説いており、それを踏まえ作成された儀軌（密教における諸規則及びそれを記した文献）が、「辟鬼珠法」です。「辟鬼珠法」は青面金剛を守庚申の主尊としており、それで青面金剛が庚申信仰の本尊になったと考えられています。

青面金剛の右側は右方童子、左側は左方童子です。共に青面金剛に近侍します。前方（下方）の 4 体の鬼に関しては、『諸宗仏像図彙』に「庚申青面金剛」の掲載図があり、そこでは「四句文刹鬼」と記されています。その姿形から右端の肌色の鬼が「是生滅法」、緑色の鬼が「諸行無常」、赤色の鬼が「生滅滅已」、左端の青色の鬼が「寂滅為楽」と分かります。「四句文」は涅槃経の経文からとられています。他の眷属としては、2 羽の鶏（二鶏）、3 匹の猿（三猿）が描かれています。一説には二鶏は夜明け、つまり守庚申の終了を告げる存在のためと言われており、三猿は三尸になぞらえて、人の悪事を「見ざる、聞かざる、言わざる」とするためと言われています。



画像 1 庚申信仰の掛け軸

ちなみに飯能市域の庚申信仰についてですが、江戸時代には盛んだったようで市内に多くの庚申塔が見られます。また、大字南川や岩沢では、昭和 50 年代頃まで庚申講が行われていました。

【参考文献】

中村元他 編『岩波 仏教辞典』岩波書店 平成元(1989)年
福田アジオ他 編『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館 平成 11(1999)年
吉岡義豐 「庚申經成立の問題」『印度學仏教學研究』16(2) 昭和 43(1968)年 日本印度学仏教学会
梶川辰二 編『諸宗仏像図彙』3 明治 19(1886)年 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/818700/1/9
飯能市史編集委員会 『飯能市史 資料編Ⅵ(民俗)』 飯能市役所 昭和 58(1983)年